論 文 の 内 容 の 要 旨

論文題目　　「天皇ご一家」の表象
　　――歴史的変遷とジェンダーの政治学

氏 名　　北　原　　恵

私たちはなぜ元旦になると「天皇ご一家」写真を見せられるのか、「ご一家」写真と合わせて、正月の一般参賀が象徴する天皇家の「プライベート／パブリック」なイメージは、どのように構築され、どんな機能を果たしているのか。これらの疑問から始まった本論文では、正月新聞の「天皇ご一家」像の歴史的変遷をたどり、それが「家庭」の実体化が進む 1920 年代に原型を表わしやがて戦争化に向かうにつれて定着したことを明らかにした。

まず第 1 章では前史として、明治期の錦絵や石版画、新聞附録における皇室の視覚化の過程を検証した。明治初年から天皇の巡幸などをビジュアル化し人々にその存在を広めてきた錦絵は、明治 10 年代に入ると次第に天皇の容貌を具体的に表現するようになり、一方、明治 10 年代半ばから普及し始めた新しいメディアの石版画は、20 年代前半に最も隆盛を極め、天皇とその家族も主要なテーマのひとつとなった。石版画に描かれた天皇・皇后と家族像は、錦絵と異なりその容貌の類似性を特徴とする記念碑的肖像である。明治に入り近代新聞が次々と創刊されるなかで、附録は顧客獲得のための重要な手段として発達し、明治 20 年代になると天皇やその家族たちの肖像が、附録として頻繁に登場した。新聞附録はその後も続くが、正月に発表される皇室の肖像は、次第に正月紙面のなかに主要な場所を移し変えていくことになる。本論文で、正月新聞を分析のメディアのひとつとして選択した理由は、正月新聞が、各年の「日本国家」としての凝縮された表象を見るのにふさわしいメディア空間だと考えるからである。植民地の正月新聞についても調査したが、その結果は補論にとどめた。

第２章では、大正末から元旦紙面に定期的に表出するようになる皇室像の変遷と特徴を分析した。当初、近代化・西洋化・科学の推進者として単独で登場した皇太子は、昭和に入ると皇后とともに御真影として姿を表わすようになった。それは、第一次世界大戦後の世界的な君主制の崩壊と国内での大正天皇の病気という二重の危機のなかでの天皇制再編であった。このような危機を察知した支配層が着目したのが、新中間層の出現により実体化されつつあった「家庭」である。日中戦争が本格化する 1937 年には子どもたちを含めて「家族」全員で登場するが、その後、激化し泥沼化する戦局に合わせるかのように、家族から離れた御前会議の天皇が出てくることが検証された。当時、皇室を表わす言葉として正月の新聞には、中国の故事に起源を持つとされた「竹の園生」という用語が用いられていた。筍のように次から次へと生を再生産する「竹の園生」は、皇室の長寿や連続性を祝うと同時に、兵士が次々と死に行く戦争の最中に「国民」を死へと駆り立て、大日本帝国という空間の最高の特権性のメタファーとして登場した。正月新聞に現れる天皇の家族の写真は、近代天皇制の創出、近代家族の誕生、家族国家による国民統合システムの推進、カメラの大衆化、写真を撮る習慣化と受容者の意識変化、家族崇拝の儀式・記念化、正月の国家的祝日化等々のなかでこそ創出され得た表象であり、その表象が天皇制を遂行的に再構築したのである。

第 3 章では、戦前の天皇・皇后の役割を象徴化する図像「①祈る、②統率する、③癒す」を考える。扱う素材は、1943 年の第二回大東亜戦争美術展に特別奉掲された藤田嗣治の《天皇陛下伊勢の神宮に御親拝》、宮本三郎の《大本営御親臨の大元帥陛下》、小磯良平の《皇后陛下陸軍病院行啓》である。これらの三枚の油彩画は、当時、第二回大東亜戦争美術展において他の戦争画を率いる役割を果たし、ヒエラルキーの最高位に位置していたにもかかわらず、戦後、画家の業績一覧からも「戦争画」の美術史研究からも消し去られ忘却されていく。戦争に関与する天皇・皇后像を排除して戦後再構築された「戦争画」というジャンルと言説化の政治性にも疑問を提起した。

第 4 章・5 章では、1945 年の敗戦から独立を迎える 1953 年までの時期に、天皇や一家の表象の再編成を検証した。まず第 4 章では、1945 年 9 月 27 日に撮られた昭和天皇とマッカーサーの会見写真に焦点をあて、撮影・流通の経緯だけでなく図像学的に分析し、敗戦の事実と屈辱を日本国民に刻印したと言われるこの会見写真の再考を試みた。「屈辱的な写真」であるにもかかわらず、人々はなぜ忘れようとしないのか、「屈辱」を成立させる根拠と写真の言説化の歴史を、ジェンダーやナショナリズムを軸に考察した。会見写真の天皇は「女性化」されることによって「自己犠牲の母性」像として受容され、戦争責任・戦後責任を忘却するための装置としても機能したのである。

第 5 章では、敗戦後の天皇制の危機にあたって、再編成された天皇と家族の身体表象、新たに創出された「一般参賀」と「ご一家」写真という表象装置について分析する。敗戦は、天皇のジェンダーに危機的な境界喪失と動揺をもたらす。戦前の大元帥イメージを継承した新たな天皇服の制定や、1946 年元旦に背広を着て女性家族のみと写真に収まった「人

間天皇」のイメージは、天皇の存続と地位をめぐる政治を背景に、まさにジェンダーを軸として展開された政治学として読み解くことができる。このジェンダーの錯綜した「人間天皇」の写真は、日米合作によって撮影され広められた。撮影したのは、戦争中、戦意高揚のための国家的プロパガンダを最先端で担っていた写真家や技術者たちだった。

天皇・皇后・皇太子の団欒する写真は、占領期を終えた独立前後の元旦に登場し、「ご一家」という言葉を伴って初めて登場する。一方、巡幸で多大な力を発揮した天皇の現前性は、1948 年の「国民参賀」、そして 1953 年からは、「一般参賀」という呼名に替わって保証されるようになった。日本の独立と国際社会への復帰の祝福と決意は、「天皇ご一家」像の（再）構築と、皇室の「公私」の表象によって完成されたのである。創出された皇室の「公私」の表象と境界区分を機能させることによって、宮中祭祀は一家族の伝統行事の「私事」として生き残ることができた。

第 6 章では、まず 2001 年の雅子妃の妊娠・出産、育児について、大量に流されたテレビや週刊誌、新聞のビジュアルイメージを分析、共同して育児にあたる夫婦像や「育児する皇太子」像が、男女共同参画時代を背景として新しく提示されたこと、労働の構造的変化のなかで決定されていくことを明らかにした。さらに、皇后や皇太子妃たちの出産や出産後の授乳が、どのように表象され伝えられてきたのかを明治初年までさかのぼって検証した結果、戦前、良子皇后の授乳が、「母性愛」や「慈悲」と直接的に結びつけられ象徴化され、皇族女性の出産報道が大正末から急増すること、皇后の母性讃歌と皇室の子どもたちが正月新聞に登場する時期と一致することが検証された。

戦後、皇太子妃の授乳は、あらたな役割を担って象徴化されることとなった。美智子妃の母乳育児と乳人廃止は、「旧弊を廃し民主的に改革された天皇家」のイメージと、育児責任を一身に担う母親像をアピールするために、その後もくり返し言説化された。

最後に、雅子妃の妊娠・流産・出産報道のなかから新たに焦点化した皇室の「プライバシー」概念を検証した。皇室の「プライバシー」は、所与の概念として存在してきたわけではない。「プライバシーだから公表しない」のではなく、公表しないことによって「プライバシー」は築かれてきた。その結果、妊娠・出産のプライバシー化は、相対的に皇室の「私事」の領域を狭めて公的行為との境界線の引き直しを加速させているように思われる。戦後の天皇制は、「秘匿／公開」と「プライベート／パブリック」のそれぞれのふたつを基軸に表象されてきた。この二本の軸は、天皇一族の表象の細部に適用される。秘匿されつつ晒されなくてはならない皇族の身体――。身体内部の秘匿性が崩れたとき起こるのが、「不敬」、あるいは「王殺し」である。昭和天皇が死に瀕したとき、体温・脈拍数など天皇の身体内部を曝す連日の報道は、王殺しの通過儀礼として必要とされた。下血報道に対しては、それゆえに「プライバシーの侵害」だとも「不敬」だとも非難されることがなかったのである。

＜女＞の身体は、戦後の天皇制の再編成において常に要となってきた。皇室の表象において、最も多くメディアに姿を露出させるのは、皇族女性である。それは、女性が眺めら

れる存在であり、消費される対象であるというジェンダーと視線の政治学に基づいているからでもあるが、それだけではない。皇族をめぐる現象は公私の境界線を横断することを特徴とし、そのとき、社会では女性領域とされる妊娠・出産などの情報が公の場で光を当てられることに意味がある。とりわけ、戦後、美智子妃に代表されるように「民間」から皇室入りした皇太子妃たちは、その境界横断性の特徴を最も体現する身体である。「民間／皇室」「公／私」の境界を彼女たちは大胆に侵犯する。初めて「民間」から「皇室」へ入ったといわれる美智子皇后は、この越境性を力として「皇室改革」イメージの推進者となった。女性皇族たちは、キモノと洋装をたくみに使い分けることによって、日本の「民族性」や「伝統文化」の象徴となることを期待され、外交では事実上のファーストレディとしての役割を担っている。ある意味において、＜女＞の越境性と＜女＞の身体が、天皇制の再編成を支えてきたといえる。ジェンダーの視点からこれまでの天皇や天皇一家の表象を読み解く本研究は、天皇制研究や家族研究、表象研究の理論的・方法論的発展をさらに深めるものである。